

令和元年度

市ヶ谷台慰霊祭 祭文

本日ここに、令和元年度市ヶ谷台慰霊祭を執り行うにあたり、ご参列の皆様を代表して、謹んで祭文を奏上いたします。

市ヶ谷台は、明治4年の近代日本陸軍の建軍からまもない明治7年に陸軍士官学校が創設され、永らく陸軍将校揺籃の地でありました。約5万1千名の卒業生が巣立っていきました。昭和16年、大東亜戦争の戦局急迫を告げる

に及び、大本営陸軍部をはじめ陸軍省、参謀本部、教育總監部、陸軍航空本部、航空總監部、本土決戦に備えた第1総軍等の陸軍の中枢機関の大部分がこの台上に移設され、激動のなかに大東亜戦争の終戦を迎えました。戦後、昭和35年自衛隊市ヶ谷駐屯地が開設され、平成12年には防衛庁が港区赤坂の檜町地区から移転し現在に至っております。ここ市ヶ谷台は、日本の近代国家建設にあたり、国家存亡に重要な軍事の任にあられた帝国陸軍将校の方々のゆかりの地であり、また我が国防衛の中核であります。

明治以降の日清・日露など数次に亘る戦争に際しては、陸軍士官学校を卒業された多くの陸軍将校の方々が、祖

国と同胞の安寧を願ひ、北は酷寒不毛の地、南は酷暑瘴癘の地に赴き、陸にまた空において、勇敢闘闘して散華されました。その数は約8千余柱に及びます。愛する家族を故国に残して異国の地で敢然と散つて逝かれた方々の「国を護る志」と一家の柱を失い後に残されたご遺族の方々の深い悲しみに思いを致すとき、今なお方感胸に迫るものがあります。

ここ市ヶ谷台では、先の大戦において、戦争の責任を一身に負われ、伝統ある我が国の将来にわたる国体の護持と繁栄を希い、自決された陸軍大臣阿南惟幾大将の遺体が野戦式に茶毘にふされました。同じく、第一総軍司令官杉山元帥、同司令部付吉本貞一大将、参謀本部参謀晴氣誠少佐など13名の帝国陸軍将校と4名の家族が自決され、国に殉じていかれました。その無念さを思うと悲痛の念に堪えません。

また、ここ市ヶ谷台には、国家のために任務の完遂に務め、志半ばにして、その職に殉じられた1976名の自衛隊殉職者が祀られていることを我々は決して忘れることがあつてはなりません。このようなかけがえのない方々を失つたことは、ご遺族はもとより、国家にとつて誠に大きな痛手であり、悲しみに堪えないところであります。今日、我が国民が享受している平

和と繁栄は、明治から現在に至るまでの間、国家存亡の危機に際して、尊い一命を捧げられた多くの陸軍将校の方々と、同じ「国を護る志」を持つて我が国の存立を担う崇高な職務に殉ぜられた自衛隊殉職者の方々の無私の献身により築かれた礎の上にあると言つても過言ではありません。改めて、御霊への限りない尊崇と感謝の誠を捧げますとともに、安らかなご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

この市ヶ谷台のメモリアルゾーンにおいて、陸軍将校の方々の戦没者を慰霊するとともに、自衛隊殉職者を追悼することは、皆様が残された伝統を顕彰し継承することでもあり、誠に意義深いものがあります。私共は、「国を護る志」の大切さをしっかりと、後世に受継いでいかなければならないと、決意を新たにしております。

本年5月、天皇陛下のご譲位により、皇太子殿下が新天皇陛下に御即位され、令和の御代が幕開けいたしました。ご譲位あそばされた上皇陛下は、御即位以来30年、戦没者の慰霊には格別の大御心を寄せられ、国内外にわたり慰霊の旅を続けてこられ、戦没者の尊い御霊に対して、日本の国と国民を代表して感謝と追悼の誠を捧げられました。この上皇陛下の戦没者の慰霊に対する強い思召しにそうよう、私共は、

思いを新たに、尊い一命を日本の国家・国民のために捧げられた帝国陸軍将校の戦没者と自衛隊殉職者の御霊を末永く慰霊・追悼するとともに、その事績を永く後世に伝えてまいります。

先の大戦が終結してから長い歳月が流れ、今や戦後生まれの世代が国民の主力を占めるようになり、平和と繁栄に慣れるうちに、戦没者等に対する敬意と慰霊の心が薄れつつあることが憂慮されるとともに、公のために尽くす責任感の希薄化と国民道義の頹廃が懸念されます。私共は、先人から託されたこの誇り高い日本が、「日本らしさ」、「日本人らしさ」を取り戻し、本来の日本に再興されることに今後とも努力を続けていくことをお誓い申し上げます。御霊のご加護を切にお願い申し上げますとともに、日本国の安寧と繁栄を念じつつこの記念すべき日の慰霊の言葉といたします。

令和元年9月11日

公益財団法人偕行社

理事長 森 勉